

九条の会 金大ネット 通 信

事務局 金沢大学 経済学部 小林研究室 (264-5415)

靖国神社雑感 遊就館上映のドキュメント映画から

経済学部 小林信介

先日の金大祭において、「蟻の兵隊」上映会を無事開催することができました。ご協力いただいた皆さま、またご来場いただいた皆さまに御礼申し上げます。「蟻の兵隊」に関する詳細なコメントはホームページの方にお任せするとして、私は靖国神社遊就館にて現在上映されているドキュメント映画の問題点を考えてみます。

靖国神社遊就館では『私たちは忘れない 感謝と祈りと誇りを』と『人間魚雷 回天』の2編の映画が上映室で、『支那事变全線総攻撃』と『君にめぐりあいたい』の2編が展示室で現在上映されています。唯一全編をじっくり視聴できた『私たちは忘れない』を中心にその雑感を述べていきます。

この映画は約50分で、靖国神社後援のもと日本会議・英霊にこたえる会により制作されています。同映画のリーフレットでは、「教科書では教えない」「真実の歴史」を描いたとされ、ホームページの紹介文には「我が国近代史の戦争の歴史を、当時の貴重な映像で再現し、東京裁判で歪められた歴史の真実に迫るドキュメント映画」とあります。こうした言説は、「大東亜戦争」という呼称に固執し、過度なナショナリズムに拘泥された自由主義史観をはじめとする人々が好んで用いています。キャッチコピーとしての一定の効果が未だにあるようですが、私自身にはいささか食傷気味でした。ただ、そんな私の気を引いたのが副題でした。戦後の日本社会は、戦争による甚大な被害に対する反省を出発点としてきたことは改めて言うまでもありません。やがて戦争に関する認識は、日本の被害からアジア諸国の被害、そしてそれと表裏をなす日本の加害に目が届くようになりました。今日、日本近現代史で「アジア・太平洋戦争」という呼称を用いる背景もここにあります。つまり「被害」が大前提となっている訳ですが、副題を見る限りこれが『私たちは忘れない』

には欠落しているのです。

本編においても、被害が前面に出る構成ではありません。映画を貫く戦争観は「自存自衛」「アジア開放」そして「忠魂」であり、それが「東京裁判の不当性」という主張に繋がっています。このなかで被害は「英霊」である軍人軍属に限定され、かつ「尊い命を捧げた」と置き換えられています。戦前とりわけ戦時期の靖国神社は、戦争への民衆動員の装置として機能していましたが、この置き換えを見る限り、現在の靖国神社もまた容易に戦前の機能を回復する虞があるといえます。これを踏まえて、以下に具体的な内容について述べていきます。

さて、『私たちは忘れない』本編は、真珠湾攻撃の記録映像から始まります。「大東亜戦争」の定義は「今次の対米英戦争」に「支那事変をも含め」たものですから（1941年12月10日大本营連絡会議の決定）その始まりは1937年7月7日の蘆溝橋事件です。自存自衛論はあくまで欧米列強に対しての自衛ですから、この立場に立つ限り「大東亜戦争」と言いながらも対米戦争を主軸として描かざるを得ません。最初の映像が真珠湾攻撃となっていることは、この現れといえます。この自存自衛論の視角は、日露戦争や南部仏印進駐を語る際にも確認できます。

真珠湾攻撃を見せた後、映画は明治維新から語り起こします。この中で、アジア解放論的視点を随所に確認できます。日清戦争は朝鮮半島を清国の支配から解放するための戦いであり、アジア太平洋戦争下の南進は欧米植民地解放戦争としているのです。遊就館展示室にてインパール作戦におけるインド国民軍との共同作戦を強調しているのもこの文脈です。しかし、朝鮮半島を合併という名の植民地統治下においたことやインパール作戦の「敵」側にもインド兵が多数いたことについては殆ど触れていません。「大東亜戦争」のもう一つの定義である「大東亜新秩序建設」という後付けの戦争目標は、殆ど姿を変えずに「アジア解放論」として受け継がれているのです。

アジア解放論には様々な矛盾点がありそれを一々指摘する紙幅はありませんので、一点のみ述べるに留めます。靖国神社が祀る「英霊」のなかには植民地支配を受けた台湾・朝鮮（今日の韓国・北朝鮮）の人々もいます。彼らはいくまで「同胞」として位置づけられているのです。これは「解放」する対象からこの人々が除外されていることに他なりません。このことは「アジア解放論」の大きな矛盾点です。2000年8月に石川護国神社に建てられた「大東亜聖戦大碑」に朝鮮人特攻兵の氏名が無断で刻銘されていることも、この一つの現われです（この問題に関しては、昨年度の市民大学院論文集に掲載されている山口隆さんの論文をご参照下さい）。

私は『私たちは忘れない』でも遊就館展示室でも主張されている「(英霊に)こたえる」ということ自体には異論がありません。ただ、矛盾に満ちた「アジア解放論」に立ち、動員装置であった靖国神社に祀られ続けることが「こたえる」ことになるのかには大きな疑念が生じます。もちろん、戦争犠牲者を著しく限定した形で「こたえる」のも不適當です。ただ、「英霊」にとって「国を護る」こと、さらにはアジア平和への表現が戦うことであったのならば、今日の表現は9条を堅持し平和を維持することであり、それが「こたえる」ことになるのではないかと考えます。(なお、私は9条堅持が平和を守る唯一の方策であると考えてはいません。自衛隊・在日米軍などの軍事プレゼンスを含め、これについての議論は、別の機会にできればと考えます。)

最後に、今日、東アジア共同体建設を模索する動きが出ています。それは大東亜共栄圏のような垂直的統合ではなく、EUのような水平的統合であるべきです。靖国神社のもつ「大東亜戦争」史観はこれに真っ向から反対するものであり、この点においても靖国神社のあり方は、議論を要するものであるといえます。

映画『蟻の兵隊』の上映会から

金大祭開催中の11月4日と5日に、『蟻の兵隊』の上映会を行ないました。両日とも好天に恵まれ、大学祭への人出は、山の中の大学という不利なロケーションを考えれば、かなり多かったように思いました。しかし、上映会への参加者は、残念ながら、当初予定した200名には届かず、160名ほどでした。しかし、このような硬い映画にも拘らずわざわざ観に来て下さった方々が160名もおられたということは、やっただけの価値は十分あったと思っています。

映画は、本当にいい映画でした。ラストシーンは、字幕に最高裁が蟻の兵隊達の上告を「棄却」と、一言書かれていただけでしたが、出来れば場内の明かりをもう少し点けないで欲しいと切に思ったほど心を揺さぶられました。80歳を越える高齢の元兵士達の「このままでは死んでも死にきれない」という言葉は、彼らの年齢を思えば思うほど一層強く胸に響きます。知り合いの学生が、「最高裁はあの元兵士達が全員が亡くなるのを待っている気がしてならない」と、感想を漏らしていたが、本当にそう思った。

私達も、もっときめ細かな宣伝をして、もっともっと沢山人、特に若い人に観に来てもらえるようにすべきだったと反省しています。

以下に、上映会の際に寄せられた感想文のごく一部を載せさせて頂きました。(山辺)

僕は大学二年生ですが、このようなことについては全く知りませんでした。事実を明確にしようとする奥村さんの姿を通して、戦争がどのようなものであるのかを、僕達の世代は考えるべきだなと思いました。

戦争というものを実際に知らないです。実際の戦争に加わった一人の老人が、自分の最後の力を振り絞って自分の犯した足跡をたどっていく姿にとても感動しました。どこにそんなエネルギーがあるのか不思議に思えますが、それを次世代の私達に伝える責任があると確信しているからだと感じました。憲法改正が取り上げられている現在、今日の映画を見た今の自分の気持ちを忘れないようにしたいと思います。

私は 1955 年生まれ (51 歳) 男性です。午前中、田んぼで秋の田おこしでトラクターの運転をしてきました。忙しい仕事を抜けてやってきて、よかった。観るべき映画でした。こういうチャンスをいただき、ありがとうございました。

九条の会、七尾の会員の一人です。私たちの会でも是非この映画を上映して戦争について知ってもらいたいと思っています。戦争を知っている人、体験した人がだんだん少なくなっていく今、是非この映画を見てもらいたい。

安倍さんの美しい国は花咲く国ではなく平和で戦争のない国でこそ美しいのです。じわじわおしよせてくる戦争の足音にしっかり耳を傾けて今の平和を守らなければ。

国とは、国家とは一体何なのでしょう？われわれ国民が国を信じ、国に守られなくてどうして明日を信じて生きていけるのでしょうか。

もっとこの国を信じ、誇りを持ちたいと心から残念な思いとそうでないことへの怒りでいっぱいです。

今回は、今の靖国神社がどのようなことをしているのか、小林先生からレポートをいただきました。また、金大祭での『蟻の兵隊』の上映会について、ご覧になった方々の感想文から、一部紹介させていただきました。感想文の全文は、今後の通信で紹介するとともに、近々ホームページ上に掲載する予定です。皆様からのご意見などもお寄せください。(編集部 tomnori1940@yahoo.co.jp)